サクソフォン奏者／アイオワ州立大学教授 **ケネス・チェ**

KENNETH CHEE

アジアと日本への架け橋になる

香港を飛び出てアメリカで成功。ソロで大活躍中！

アメリカ・サクソフォン界の中堅どころとしてアクティブにソロ活動を展開し、アジア各国でも存在感を増しつつあるチェ氏が、ほぼ10年ぶりに再来日。CDでも共演した須川展也氏と白熱のデュオコンサートを行った。

取材・構成＝佐藤 渉（サクソフォン奏者）　写真＝中村宣一　記事協賛＝ヤマハ株式会社

――お生まれは香港。サックスを学ぶ環境としてはどんなところでしたか？

チェ　サクソフォンの専門家はいないに等しい町です。私が始めたころも、現在も。中学の吹奏楽部でサクソフォンを始めたとき、手ほどきしてくれたのはバンド・ディレクターで、彼はファゴットを吹く人間でした。トランペットを吹きたいと言ったら「歯並びと手を見せて」といわれ、「君にはサックスが良さそうだ」と。入部してすぐに分かったんですが、要するにサックスのメンバーが一人足りなかった（笑）。

香港には、アメリカの大学でサックスで修士号を取った人がたしか一人いるはずですが、今でもクラリネット吹きがサックスを教えているような状況です。何とかしたいと、私は2009年に香港国際サクソフォン・シンポジウムというのを開きました。私の師であるユージン・ルソー先生や、フランスからクロード・ドゥラングル氏を招き、私と交流のあるサクソフォン奏者たちも交えて演奏しました。シンポジウムは今年の夏も行われる予定で、カナダからジュリアン・ノラン、クロアチアからザグレブ・サクソフォンカルテットを招きます。

香港のクラシック・サクソフォンを底上げするだけでなく、周辺のアジア各国にも刺激を与えたい。マスタークラスもあり、12人の枠にはアメリカ、中国、台湾、日本から学生が集まります。ヤマハをはじめとする企業の協賛を得ながら、少しずつ軌道に乗り始めました。

ルソーの録音を聴いて試行錯誤

――ルソーさんとはどんな出会いがあったのですか？

チェ　香港に旅行でお見えになったときに演奏を聴いてもらうチャンスがあったのです。1989年のこと。翌年、リサイタルを開くために再び香港にみえたとき、私と両親に強くアメリカ留学を勧めました。以来、インディアナ大学で学士号、修士号、さらにアーティスト・ディ

Interview

KEN TSE

母は音楽の教師から小学校校長までつとめ家ではいつもピアノを弾いていたという。チェ氏は7歳でヴァイオリンを、9歳でピアノのレッスンも始めたが「長続きしなかった」と笑う。

ケネス・チェ Kenneth Tse

香港生まれ。香港芸術アカデミー、インディアナ大、イリノイ大に学ぶ。インディアナ大ではアーティストディプロマを取得した最初のサクソフォン奏者。1996年ニューヨーク・アーティスト・インターナショナル・コンペティションで優勝、カーネギーホールで世界デビューしNYタイムズに「若きヴィルトゥオーゾ」と評された。23才でクリスタル・レコードに初録音。これまで10枚のソロCDをリリース。D.キャンフィールド、J.チータム、W.ハートレイほかの作曲家から作品を献呈され多くの曲を初演。2009年に香港国際サクソフォンシンポジウムを組織し、香港サクソフォン協会を設立するなど故郷のサクソフォンの発展にも努めている。アイオワ大学教授として指導に当たり国際サクソフォン協会副会長でもある。

須川さんとは奏法のコンセプトや音楽的なアイデアなど共通する点がとても多い。

プロマを得るまでルソー先生の下で勉強することになったわけです。

――一人で香港からアメリカに渡り、カルチャー・ショックなどは？

チェ 食事以外に、ということですよね？（笑）ほとんど西側諸国と似た暮らしをしていたので、文化的な差を感じることはなかったですね。勉強できることがただ嬉しく、たくさん練習して上手くなることしか頭にはなかった。時々は今の奥さんとデートしたりはしましたが（笑）。

――ルソーさんにはどんな影響を受けましたか？

チェ まず、あの美しいサウンドに惹きつけられました。香港では先生がいなかったから、ルソー先生の録音を聴いて試行錯誤を重ねたんです。今でも先生の音色は大好きですよ。

大学での先生は、技術的な問題を細かく指摘することはなく、いつも音楽的にレベルの高い演奏を求めました。技術的なアドバイスで覚えていることといえば、常にレジスター間のバランスをとり、均一な音色を保つように、ということだけ。

須川氏との出会いと共演

――インディアナ大学時代に須川展也さんと出会われた。

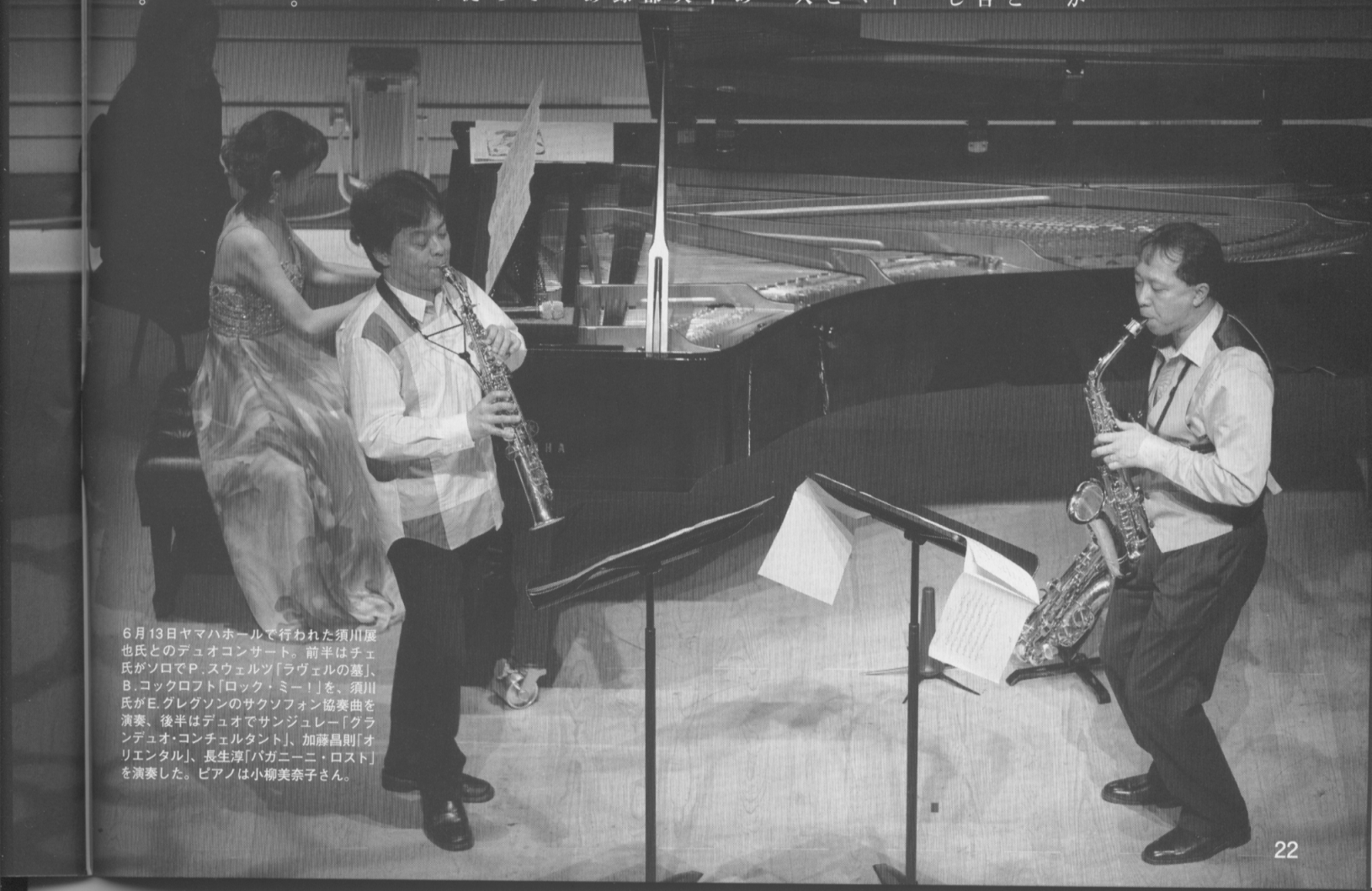
チェ 私の記憶では日本でお会いしたのが最初のはず（笑）。でも須川さんがおっしゃる方が正しいのでしょう。私が受けた1996年のコンクールに須川さんが審査員としてお見えになったんですね。

99年に私は日本ツアーを行い、そのときも須川夫妻とお会いしたほか、服部吉之先生や林田和之さんとも一緒に演奏したり交流することが出来ました。

その後、2005年に私が教えるアイオワ大学に須川夫妻を招き、演奏会とマスタークラスをお願いしました。そのとき「一緒にCDをぜひ作ろう」と二人で盛り上がったんです。しばらくして、2008年8月に録音すべく準備を進めたのですが、その年の6月にアメリカ中西部が500年に一度という未曾有の大洪水に襲われてしまったんです。州北部の一つの町が完全に消滅してしまい、録音を予定していたアイオワ・シティにある大学の建物も使いものにならなくなってしまった。今も仮設の建物で授業しているほどです。それで録音を半ばあきらめていたら、州の他の大学がホールを提供してくれることになり、何とか録音が実現しました。

――2008年にクリスタル・レコードからリリースされた《Stellar Saxes》がそれですね。今回ヤマハホールでも一部の収録曲を共演されました（6月13日）。

チェ 録音のために委嘱した長生淳氏の《パガニーニ・ロスト》と加藤昌則氏の《オリエンタル》を演奏したほか、サンジュレーの《グランデュオ・コンチェルタント》でも共演しました。ソロで私は2曲。



6月13日ヤマハホールで行われた須川展也氏とのデュオコンサート。前半はチェ氏がソロでP.スウェルツ「ラヴェルの墓」、B.コックロフト「ロック・ミー！」を、須川氏がE.グレグソンのサクソフォン協奏曲を演奏、後半はデュオでサンジュレー「グランデュオ・コンチェルタント」、加藤昌則「オリエンタル」、長生淳「パガニーニ・ロスト」を演奏した。ピアノは小柳美奈子さん。

P・スウェルツがピッコロ曲をソプラノ・サックスのためにアレンジした《ラヴェルの墓》、この曲は2009年にタイで行われたサクソフォン・コングレスで初演しました。もう1曲、B・コックロフトのアルト・サックスのための無伴奏曲《Rock Me!》は私のために書かれたもので、ロックのリズムに乗ってさまざまなサウンド・エフェクトを繰り出す楽しい曲です。須川さんは、今年の管打楽器コンクールの課題曲にもなったグレグソンの協奏曲を演奏して圧巻でしたね。

——須川さんとの共演は今後も続くのですか？

チェ ぜひ続けたいですね。奏法のコンセプトや音楽的なアイデアなど共通する点がとても多く、デュオとしても非常に上手く行っていますから。喧嘩したこともまだありませんしね（笑）。

ヤマハ・カスタム第1世代で始めた！

——ヤマハとの縁は？

チェ「ヤマハ・ヤング・パフォーミング・アーティスト」という21歳以下の学生を対象としたオーディションがアメリカにはあり、私とオーティス・マーフィが同じ年に選ばれたとき以来です。二人ともその後ヤマハ・アーティストになったので、学生時代からずっとヤマハのサポートを受けて来たことになります。

——最初に手にした楽器もヤマハ？

チェ いえ、セルマーのマークⅥ。「古くなったから処分したい」という人から300ドルで買ったんです。

——安い！

チェ 売った人は価値を知らなかったんですね。でも、私もその楽器を1000ドルで売ってしまったんですが（笑）。そのお金を元にしてヤマハを買えたのですから、それで良かった。まだ中学生でしたが、ちょうどヤマハ・カスタムの第一世代が発売されたばかりで、YAS875と855を試奏し、855を購入しました。その楽器はずっと私の愛器になり、今でも使っています……、とヤマハの方に言ったらビックリされましたけどね（笑）。

——カスタム855は、その後、改良を重ねて現在の875に至っているわけですが。

チェ 吹奏感の自由度が高くなり、息が入りやすくなっていますね。結果として、855よりも音が明るい方向にデザインされているように感じます。私自身は855の音も捨てがたく、より抵抗感と響きの強いこの楽器も使い分けています。世界で愛用されていくために、新しいヤマハがよりモダンで洗練された味付けになるのは当然の方向性と言えるでしょう。

中学時代に買ったヤマハ・カスタムYAS-855を今でも使うことがある。

気に入っている作曲家は伝統的な語法による作曲が得意なD・キャンフィールド。

キャンフィールドの作品に注目

——アメリカでは、チェさんと同世代のサクソフォン奏者が中核をなす存在になっています。

チェ われわれ若い世代、と言ってもヘムケ先生たちの世代に比べての話で、もうそれほど若くはないんだけれども（笑）、おっしゃる通り活躍している人がたくさんいます。オーティス・マーフィ、ティモシー・マカリスター、スティーブン・ステューセック、トム・ライリー……。

アメリカには北米サクソフォン連合（NASA：North American Saxophone Alliance）というのがあり、毎年行われる地域ごとのコンファレンスと2年に一度の全米コンファレンスを通じて、情報交換を行い新曲を発表しあったりしています。前回私が来日して10年以上が経ちましたが、日米間でこうした情報交換がまだあまり進んでいないのは残念です。

——最近アメリカで注目を集めている作曲家は？

チェ アメリカに限らずヨーロッパにも言えることですが、1950年代から60年代にかけて作曲家たちは大きく二つの方向に分かれて行きました。一つは伝統的な語法による調性音楽。サックスでいえばミヨーやデュボアといったスタイルですね。もう一つは無調のアヴァンギャルドで、ブーレーズやベリオ、シュトッ

10曲以上もの作品を献呈されているアメリカの作曲家デイヴィッド・キャンフィールドと香港で。

クハウゼンといった人たち。しかし、最近のアメリカ人作曲家で人気の高いディヴィッド・マスランカに代表されるように、アメリカの多くの作曲家は他の地域の人たちほどアヴァンギャルドな方向には進まなかったようです。

私個人が気に入っている作曲家は、伝統的な語法による作曲を得意とするデイヴィッド・キャンフィールド（David DeBoor Canfield）。彼とは2000年頃からの付き合いで、これまで10曲近く私のために書いてくれました。今年の10月には彼の新しいコンチェルトを録音する予定です。彼の曲でいま世界的に人気を博しているのが《Concerto after Gliere》。ロシアの作曲家グリエールのテーマに触発されて書かれたとてもロマンティックな曲で、この6月にパリでドゥラングル氏も演奏するそうですよ。私のライブ演奏がYouTubeにアップされていますから、興味のある方はぜひご覧になってください。

この曲はルソー先生のために書かれましたが、先生が私に初演するよう勧めてくれました。年内には、この曲と、クレストン、ダール、チータムのコンチェルトを収録したCDがMSR Classicsというところから発売されます。

中国はまだまだ発展途上

——中国本土での活動は？

チェ 北京や上海でコンサートを行っています。中国のクラシック・サックスはまだまだ発展途上。日本や台湾のようなレベルにはありません。近年は多くの中国人学生たちが海外で勉強していますし、私もこれからの発展の手助けをしたいと思っています。

——タイは近年さまざまな国際イベントを主催して注目されます。

チェ トランペットの国際大会はじめ、サクソフォンではジャン＝マリ・ロンデックス国際コンクールや私が参加したサクソフォン・コングレスなどが開かれていますね。すべてマヒドン大学がホストをつとめ、政府からも大きな支援を受けているようです。

——日本は今回がほぼ10年ぶりだそうですが、初来日は？

香港のサックス界を底上げするだけでなくアジア各国にも刺激を与えたい。

バンコクで開かれたサクソフォン・コングレスでタイランドフィルハーモニーと協演するチェ氏。

チェ 1990年にアジア・ユース・オーケストラのメンバーとして来日したのが最初でした。あの偉大なメニューインの指揮で夏のあいだ京都、大阪、東京などをまわったのは貴重な思い出です。たまたまサクソフォンが必要なプロコフィエフの《ロミオとジュリエット》や《展覧会の絵》が演奏される年に応募し、選ばれたのは本当に幸せでした。

今回も演奏の機会を与えてくださった関係者の皆さんにとても感謝しています。日本にはたくさんの友人がいて、これまで何度も彼らに声をかけていただきながらタイミングが合わず、あっという間に10年が過ぎてしまいました。これからはもっと頻繁に来日して、多くの人たちと交流できればと思っています。

ヤマハホールで。